



キリスト教主義教育研究プロジェクト研究会：「 GPとキリスト教主義リベラル・アーツ教育」（2004 年6月12日開催）報告

著者	永野 茂洋
雑誌名	あんげろす：明治学院大学キリスト教研究所ニュー ースレター
号	35
ページ	4-5
発行年	2004-10-20
URL	http://hdl.handle.net/10723/358

キリスト教主義教育

研究プロジェクト研究会

「GP とキリスト教主義

リベラル・アーツ教育」

(2004年6月12日開催) 報告

永野 茂洋

キリスト教主義教育研究プロジェクトは、ここ数年間、学外からゲストスピーカーをお招きして、大学におけるキリスト教主義教育のあり方に関する研究会を断続的に開催してきた。今年度の春学期はその一環として、新潟の敬和学園大学から、キリスト教学の担当教授であり、また、教務部長として大学改革全般に重責を担って来られた山田耕太先生

(専門は新約聖書学)をお招きして、2003年度から敬和学園大学が全学を上げて取り組まれている「チャペル・アッセンブリー・アワーの単位化」の試みについて、貴重なお話をうかがうことができた。

敬和学園大学は明治学院とも関係の深い、開学14年目の人文系単科大学であるが、開学以来、全学必修の「キリスト教学」(4単位)を中心とするキリスト教の知識・価値観に関わる教室での教育と、その実践的教育プログラムとして学内外でのボランティア活動を単位化した「ボランティア論」(全学必修2単位)・「ボランティアA~D」(自由選択各2単位、以上最大10単位)、それに、毎週1回金曜日の3限目に行われる学外講師の講演と礼拝を組み合わせた「チャペル・アッセンブリー・アワー」の3つを、キリスト教主義教育の3本柱として連動させてきた。

2番目のボランティア教育は、ボランティア・センターと教務課とが全面的にタイアップして取り組んでおり、学生だけでなく、全教員がボランティア活動に参加する大変ユニ

ークなものである。その中心を担っているのがボランティア・センターで、これは明治学院大学のボランティア・センターのモデルのひとつとなったものであるが、ボランティア教育を学生時代に学んでおくべき現代教養のひとつとし、そのうちの2単位を全学必修としている点等は、明治学院大学の取り組み方とは多少異なる。

今回の話題の中心であった3番目の「チャペル・アッセンブリー・アワー」の「単位化」(自由選択科目で、前後期各1単位)は、ボランティア活動の単位化以上に大胆な試みであり、刺激的な試みである。この種の科目の単位化は全国でも類例はない。

研究会参加者の関心もこの第3点に集中して、活発な意見交換が行われた。その中で最も印象づけられたのは、第一に従来の「チャペル・アッセンブリー・アワー」を課外プログラムから正規の教育課程の中に位置づけるに際しての、礼拝についての考え方の大胆な変更であろう。もともとキリスト教の礼拝には教育的な側面が認められるが、教育機関においてはそれをより前面に出してよいのではないかという考え方である。大学で初めてキリスト教を学ぶ学生たちは、チャペルで実際に祈りの言葉や証しを聴き、また、讃美歌や教会音楽に接して、教室での理解とは全く異なるキリスト教についての理解を体験的に深めていく。そのような生きたキリスト教理解にとって、礼拝は不可欠の教育機会であり、また、キリスト教教育がこれからの社会を担う学生たちに真に必要なものであると考えるならば、むしろ、大学礼拝をもっと積極的にカリキュラムの中に位置づけるべきではないか、というのが敬和学園大学の主張である。

ところで、この科目の単位修得のためには、7割以上の出席と、毎回のミニッツペーパーの提出、それに学期末にエッセイの提出が必要となる。提出物は4人の専任教員が合議制によって評価し、成績をつける。教員は相当数の時間をこの科目のために費やすことになる

が、教員がその種の負担を負担としないという姿勢がなければ、この種の単位化はなかなか実現することはないであろう。印象深かったことの第二点目である。

第三点目は、この科目を全学必修の「キリスト教学」とリンクさせて、上記の3本柱の有機的な連関のさらなる強化を図っていることである。これによって「キリスト教学」の履修者には最低3割の「チャペル・アッセンブリー・アワー」への出席が義務づけられ、3割に達しない場合には「キリスト教学」の単位取得ができなくなった。しかし、学生たちは、それによってキリスト教を強制されているという感じは抱いていないという。むしろ、これはキリスト教主義大学としては当然のことと受け止めているらしいとのことである。

そのことは統計上の数字にも表れている。2003年度の統計では、「キリスト教学」の履修者の約半数が同時に「チャペル・アッセンブリー・アワー」を履修しており、そのほとんどが7割以上出席し、無事「チャペル・アッセンブリー・アワー」の単位を修得している。しかし、興味深いのは、残り半分の学生であって、彼らは「キリスト教学」の修得のために「チャペル・アッセンブリー・アワー」へは3割出席すればいいのにもかかわらず、2003年度の場合、彼らの出席率は平均して7割（すなわち、1人が通年26回のうち18回出席）にまで達しているという。1年間に18回前後、本格的な礼拝説教や講演に耳を傾けるという経験は、単位のための科目という枠を越えて学生たちに大きな感化を及ぼさずにはおかないだろうと思える。この制度を導入する以前の、空席だらけの「チャペル・アッセンブリー・アワー」に比して、毎回の平均出席者数は約7倍にまで増加しており、しかも、その中には単位修得を目的とせずに、ただ説教や講話のみを聞きに来るといった学生の数がかなり増えているとのことである。

明治学院大学がこのような試みを導入するのは、学生数や規模の大きさから言っても相

当の困難が伴うことは明らかである。しかし、同様の試みは、敬和学園大学に続いてすでに四国学院大学でも始まっており、規模の小さな大学から徐々に全国に広まっていく可能性は十分にありそう。

チャペルでの礼拝は、それが礼拝である以上、たとえ少数であっても、そこに集う者一人ひとりの信実が常に問われるのであって、その意味では量的な事柄は常に二義的である。しかし、他方には、圧倒的多数の学生が在学中一度も礼拝に参加せずに卒業していくという現実がある。現在のキリスト教主義大学の中で、チャペルアワーがうまく機能して活発に行われており、また、学生の出席も多いというところは、残念ながらほぼ皆無に近いと言っている。敬和学園大学の試みは、そのように一度遠のいた学生の足を、少なくとも再度チャペルに向かわせ、彼らにキリスト教についての体験教育の機会を大変うまく提供しているという意味で、真剣に検討してみる価値はあるように思われる。明治学院大学も長く同じ問題を抱えており、また、キリスト教主義大学として現状のままでよいと考えている関係者も多くはないであろう。大学礼拝を含めて本学のキリスト教主義教育の将来像をどのように思い描いたらよいか。明治学院大学においても「単位化」が現状に対する対応策として適当であるのかどうか。これらの問題を含めて、できるだけ広範な議論と検討を当プロジェクトでも引き続き行っていきたいと考えている。広く積極的な提言を寄せていただければ幸いである。

(ながの しげひろ

所員・教養教育センター教授)

